

『神代から居間へく受け継がれる感謝の思いく』

「これより神宮神嘗祭の献穀田のお田植え祭を行います。」

八幡社の総代の一声でお田植え祭がスタートしました。

神嘗祭は、伊勢神宮で最も古い由緒をもち天皇へい下の大御心を体して、天照大神に新穀を奉り、収穫の感謝をささげる祭典です。

私たちの校区にある中川さんの田んぼが、神嘗祭に献上する米を作る田んぼに選ばれてから、お世話をする地区の方々が奔走されました。私は、そのお田植え祭の早乙女役に応募して、三人の一人に選ばれました。

五月三日。ゴールデンウィーク初日の風の強い肌寒い朝、田植えが始まりました。

「もつと苗をしつかり土の中に押しこんで。」

田んぼの周りをたくさんの人たちが囲み、私たちにアドバイスをくださいます。頭では、分かっているものの、ぬるぬるとした底なし沼のような田んぼでは、思うように動くことが出来ません。

「終了します。」

総代さんの声にホッとしました。

早乙女の衣装は、赤いじゅばんに、かすりの着物、えり元とかけひもも赤で、ニュースで見たことのある茶つみ娘のようでした。

私たちが植えた苗は、列がでこぼこしてそろっていませんでしたが、田んぼを吹きぬける風に揺られて、どこか誇らしげに見えました。この苗が大きく黄金色の稲穂となり、おいしいコシヒカリになることを願いながら九月の抜穂祭の早乙女役に託したいと思いました。

インターネットで神嘗祭のことを調べてみると伊勢神宮の年中行事の中の大祭であり、天照大神が新嘗を食したという神話に由来し、その年の新穀を奉る祭であると知りました。束帯衣装や白装束に身をつつんだ人たちが、おごぞかに歩く様子が目に映りました。私は、この献上米のお田植え祭に参加するまでは、神様を祀るということについて考えたことがなかったです。今日という日々によるこび、平穏な明日を願う。そして神様に感謝と祈りをささげるといふ、古くからの人々の暮らしと神々とのつながりを気付くことができました。

私たちの植えた苗は、暑い夏を過ぎ、九月のまだ残暑の中、抜穂祭の早乙女さんたちによって無事に刈り取られ、伊勢神宮に奉納されると聞きました。

遠い伊勢神宮の神様に、新穀を届けることにより、私の感謝と祈りも届くといいなと思います。